けれどもこゝちよからず、いかにもして其在所をしらまく思ひしが、東寺の御影供にまうでんと、壬生より過る道、一陣の風吹來りけるに、えならぬ香氣有、いぶかしく其かたをさして行に、島原の廓柏やといふものゝ家なり、彼紅塵の香にたがひなければ、入りて尋るに、去るものなし、去ひてもとめて人毎にいはしむるに、一人の女の童、此頃某の女郎の櫛笄を作たまふ木屑のありしを、よきにほひする木なれば火桶にくべしが、其名殘にやといへば、やがて明の日殿下にまうし上けるに、ぬすみしは其廓に遊ぶ士なること分明にて、罪に行はれしとなん、

〔香道大意〕凡香を焚く事に三ッの名目あり、供香、空香、翫香、卽是なり、是を三香と云ふ、供香は神祇佛菩薩に香を焚きて供する事にして、之焚香の濫觴なり、其の餘裔空焚となれり、是香を敬の本なり、空焚は銀葉を敷かず、香爐を机或は折敷の上などに居ゑ置て、其の隨に聞く例なり、然に又希なる名香を用ゐる時は、特に銀葉を以て、其香の早く立ざる爲に敷、又机上より爐を手に取りて、鼻先にあてゝ是を聞く、則是を一炷聞、または名香聞とも云ひ、是翫香の初なり、

〔源氏物語若紫五〕みなみおもていときよげに去つらひ給へり、そらだきもの心にくゝかほりいで、みやうがうのかなどにほひみちたるに、君の御をひかせいとことなれば、うちの人々も心づかひすべかめり、

〔源氏物語湖月抄鈴虫三十八〕空燒するは、それとなくいづくよりも匂ひくるやらんのやうにする物也、

〔源語梯中そ〕そらにたく　ソラトハ、ソコト定メテキカズニアラズシテタク也、凡其實ナキヲソラト云意ナルベシ、タキモノゝ火ノモトノシレヌガヨキト也、

〔倭訓栞前編十三曾〕そら略○中　そらだのめ、そらだきものなどは、空しく徒らなる意也、

〔枕草子三〕にげなきもの　そらだき物去たるきちやうに、うちかけたるはかまのをもたげにい

炷香